わらび地区における住民と中山の交流

森と木のクリエーター科林業専攻 栗林　綾香

１．研究背景と目的

私は生まれてから高校を卒業するまでの18年間、長野県で生活していた。実家の目の前は八幡神社のある里山になっていて、小さいころからそこで遊んだり、キノコや山菜を採っていた。その山が、気が付くとマツクイムシの被害によりアカマツがなくなり、景色が変わっていた。そのことから、私が山に対して何かできることはないのかを考え始めた。また、両親からその山で遊ぶ子供たちが減ってしまったことを知り、家からも近い山と人が関わらなくなっていることに危機感を抱いた。

私が卒業後に就職する会社の施業地は、地域が管理している山も含まれ、人里に近く、道路沿いで人目に付きやすい場所も多い。地域の人が関わってきた場所で仕事をするからには、地域の人の思いを大切にしながら仕事をしたいと考えている。

そこで、これからの時代に必要な地域の山と人とをつなぐ方法を本研究のテーマとした。

２．中山に出会う

授業の中で、美濃市蕨生地区の和紙職人の方が、自宅の裏山の整備をしたいと考えていることを知った。話を詳しく聞いてみると裏山だけでなく、その地域にある山でも活動をしていることを知った。その山は大師山で、通称「中山（なかやま）」と呼ばれている。中山は地域の人がお祭りを開催したり、宴会を開くなど、地域で人と人をつなぐ場所であった。そうした文化的な歴史に興味をもち、中山であれば「地域の山と人とのつながり」を作れるのではないかと考え、調査を始めた。

３．中山について（概要）

中山は蕨生地区のほぼ中央にあり、集落が山を取り囲み、標高は約 250mある。山の北側及び裾野付近にはスギやヒノキなどの針葉樹が多く、そのほかはヤブツバキ、アラカシ、リョウブ、ホオノキなどの広葉樹となっている。頂上は広場のように平らになっていて、聖徳太子像や戦没者の像が置かれているほか、かつてお祭りが開かれた際には屋台が立ち並ぶ場所だった。

頂上に行くためには山を囲む集落からつながる４つの登山道から登る。どの登山道も頂上までは約30分かかる。登山道の両側には「弘法様」が立ち並ぶ。四国八十八ヶ所にちなんで弘法様が88体と、地域にもともとあったお地蔵さんを合わせて計約 100 体が安置されている。88 体ある弘法様は各家庭でお金を出し合って作成したもので、お金を寄付した人の名前が各弘法様に刻まれている。

中山では以前、毎年４月 21 日に「弘法様のお祭り」が開かれていた。そのお祭りでは中山に登り、頂上で餅まきをしたり、自分の家の弘法様の前で宴会を開いたりしていた。蕨生地区の方で70～90代に話を聞くと、この時の思い出が楽しかったと必ず話題に出る。現在、「弘法様のお祭り」は、開催場所を山の麓に変更して開催されている。

４．中山を知る

和紙職人の方から話を聞き中山を知った後、さらに中山について調べるために地域の喫茶店を訪問した。店の方は蕨生地区に住んでいて、蕨生に関する文献や切り抜きをたくさん保存されていた。蕨生地区の人に話を聞きたいお願いし、住民の方を何人も紹介いただいた。教えていただいた文献を読んだり、地域の人に話を聞いたりして少しずつ蕨生地区のこと、そして中山についての理解を深めていった。

５．蕨生地区の人に話を聞く

「弘法様のお祭り」の当時の様子を中心に、蕨生地区の23人から中山との関わりについて聞き取りを行った。お祭りの他には「小さいころに山で遊んでいた」「焚きつけのための「スギバ」（スギの葉っぱ）を拾いに行っていた」などの話を聞くことができた。話の中の60～70年ほど前の中山は背の高い木もなく眺めがよかったということだった。

６．中山と人をつなぐために行動する

地域の人に聞き取りを続ける中で、現代においては地域の人が中山に登っていないことを知った。しかし中山は登山道がいくつも整備されており、登りやすい。また、昔はお祭りなどが開催されて人が集まっていた思い出も残っている、そんな中山に登らないことに“もったいなさ”を感じた。そこで今でも語られる「楽しかった思い出」が残っている場所を交流のフィールドとすることで、中山をもう一度「山と人をつなげる場」にしたいと考えた。また中山について聞き取りをした「地域の思い出」を「人に伝えるツール」にすることで、山と人がつながり、人と人とがよりつながるのではないかと考えた。

ツールを制作するにあたり、どういった内容を伝えればよいのか、いくつか検討を重ねた。

まず、冊子を作って配布することを検討した。冊子には聞き取りした中山の思い出や、地域の方々が子供の時に遊んだ「山にあるものを使ったおもちゃ」の作り方などを記載することとした。

実際に子供向けの冊子を作り、2024 年 9 月 7 日に開催された「蕨生祭り」で冊子を用いながら、地域の子ども達にヒアリングを行った。

中山について話を聞くと、「中山には登ったことのない子」は半数以上であった。「登ったことがある子」も継続的に登っている子はいなかった。子供の親からは、蜂や蛇などの危険に対しネガティブなイメージがあり、そのイメージを変える工夫も必要だと感じた。

冊子のヒアリングをもとに、次に実際に登るための地図を作成した。地図には「頂上までの距離」や「道の歩きやすさ」などを記載し、様々な年齢の人が登山したいと思えるような情報を記載した。特に中山には登山道が４つあるので、すべてのルートを記載し、それぞれの登頂時間などを記載した。

地図を作成するにあたり、地域の人に「中山を紹介するときにどんなことを伝えてほしいか」を聞いた。その中に「登山道沿いにあるお地蔵さんを見てもらいたい」との声があった。そこで、どんなお地蔵さんが見られるのかを伝えるために「視覚的に特徴的なお地蔵さん」をピックアップして紹介することとした。

作成した地図について想定した結果となるか、地域の方々へのヒアリングを行った。方法は地図を見せながら「山に登りたくなったか」「地図の中のどこが気になったのか」を聞いた。その結果、４つの登山道すべてを記載したことに対して肯定的な意見を得た。意見の中には「自分の家から近い道から登ったことはあるが、他のルートからは登ったことがないため、登ってみたいと思った」という感想もあった。

７．考察

地域の山と人をつなげることを目標に、まずは山を知ってもらうことを目的に、冊子と地図を作成した。視覚的にも分かりやすく、様々な年代の人に手に取ってもらいやすいように工夫した。作成後に蕨生地区の住民にヒアリングを行った。「中山に登りたい」という意見も得ることができ、山に対する住民の関心度を上げることができたと考える。

また、中山の歴史について聞き取りを行った。聞き取り調査をする中で、ある方に一緒に中山に登ってもらえないか相談したところ、一緒に山に登っていただくことができた。その方は頂上に着いたときに「今年はもう登ることができないかと思ったが、来れて良かった」という言葉を述べられた。今回の聞き取りで中山に関する話をする中で、本人の関心が高まり、「中山にもう一度登ってみる」という行動につながった。

８．地域で山と人をつなぐ人になるための十箇条

蕨生地区に興味を持ち、話を聞き始めた時はどんな結末になるのか想像できなかった。ただ、いろいろな人に話を聞き、何度もお宅にお邪魔したり、お茶を飲んだりしているうちに私にも何かできるのではないかと考え始めた。

本研究で実践した過程は、私が地元で就職した時に、地域の山と人との間に関係を作ることに活かせるのではないだろうか。

地域に足を運び、実際に中山に登り、またそこに住む蕨生地区の人に話を聞いた。地域の人と関わりを持ちながら、この地域ではどんな山にしていきたいのか、あるいは、どんな山にすることで山と人がより関わることができるのか、想いを巡らせていた。

振り返ると、地域の人と地域の山との関係を作るためには、自身が地域の中に入り、良質な関係をつくる必要がある。蕨生地区で人々と関わる中で学んだ、今後自分の地域で活動をするときに大切にしたいことについて、十箇条にしてまとめた。

一、山と人をつなげ、人と人をつなげる
二、地域の面白い人を見つける
三、地域の中を散歩し、地域の生活に触れる
四、地域の思い出の話を聞く
五、自分から話に行く
六、地域に関心をもつ
七、地域の人と一緒に小さな体験を作る
八、お金儲けは考えないで行動する
九、楽しいと思うことをする
十、行動した内容を伝える

この十箇条は、活動する地域に入るとき、地域の人と関わるとき、そして実際に活動するときに、常に心がけ、大切にしていきたいことである。

９．今後の方向性

今後はこの課題研究で得たものを活かし、自分が住む地域、関わる地域で活動をしていきたい。地域の人々は、現代において山との関りが薄くなっていても、かつての自分たちと山との関わりを紐解くことで、地域の山のイメージが具体的になってくるだろう。どんな山であれば人がよりつながるのか ―― 地域の人々に積極的に話を聞き、地域の人が身近にある山に入るための「山と人のつながり」を築く活動を行いたい。